日本の植民地支配と朝鮮社会変動
―社会学から見た現状と課題

李　鐘旼

Ⅰ．はじめて

韓国で社会学者らによって主導されている社会史[1]研究は、1980年代に歴史研究の理論化や歴史的な事実をもとにした社会学理論の再構成、また、西欧偏向的な観点の止揚を目指して登場した[2]。本来社会史研究の主な関心は身分、家族、農村、宗教などであるが、開港から植民地時期までの近代社会史[3]の場合は階級・階層、イデオロギーと社会運動のなど社会学の代表的な研究対象を歴史的な脈絡から研究した。最近になっては近代的な規律権力と知識、女性と家族に関する研究が活発に行われ、その中で植民地支配に関する再解釈も進展している。

ほとんどの社会史研究は、主に韓国社会史学会の所属研究者が進めてきたので、この論文でも彼らの研究業績を中心に、できるかぎり最近の動向と課題を整理してみる。しかし、この論文はあくまでも筆者の個人的な見方をもとに整理したものであり、この時期を研究対象とする社会学者および韓国社会史学会の見解を代表するものではないことを、あらかじめ断っておく。

植民地朝鮮社会に関する社会学分野の先行研究は、いくつかの大きなテーマに分けることができる。本論文では叙述の便宜上、以上の三つのテーマに分け、研究動向および今後の課題と展望について簡単にコメントしたい。

II．分野別に見た動向と課題

1．階級／階層と社会運動

1980年代における韓国史研究において主流をなした社会経済史研究と民族／社会主義運動史の研究は、社会史の分野でも、1990年代前半期に至るまで研究の主流となった[(4)]。特に社会学界では1980年代の後半から展開された「社会性格論争」と関連して階級・階層研究に没頭していたので、階級と社会運動に関する研究が活発に行われた。植民地期研究においてもっとも論議の焦点となったのは農民層研究であった。歴史学と経済学においては、農村経済と全国的な農民運動の展開過程を究明することに集中したが、社会学界では地主を含めた農民の階級・階層的な性格、組織の役割、および農民運動の成功と失敗の要因を分析することに重点を置いた。その結果、農民層の日常生活に関する研究や階層と農民運動参加との相関関係[(5)]、また、赤色農民組合運動と小作争議などに対する評価[(6)]などが主な研究対象になった。

植民地朝鮮で人口の約80％を占めていた農民層は、朝鮮社会を理解するのに非常に重要な部分に違いない。彼らの生活状態と組織化、農民運動の経験は、解放以後の国家構成問題と不可分の関係をもつからである。しかも植民地期において農民運動が活発に展開されたので、当時の農民を積極的な行為者（agent）として把握することには異見がなかった。ただ、組織化された農民の力が、どの階層を中心に、またどのような契機で生みだされたかをめぐって、見解の相違が見られる。貧農を中心にした社会主義組織運動を重要視する見方がある反面[(7)]、中農層の役割に注目している見解も見られる[(8)]。特に後者の場合は、中農層が社会主義組織運動や理念より社会政治的な利害関係によって農民運動に参加したことと、1930年代以後は体制内に「包摂」されたことを強調している。このような研究は「下からの歴史構成」に対するさまざまな解釈のあり方を示しているが、農民運動の主体を

貧農か中農かいずれかに特定するよりは、階層ごとの生活状態と運動参加へのきっかけの差異をより豊かに提示することが今後の課題になろう。

また、労働者と都市貧民に関する研究も階級状態と階級形成の問題（階級意識とイデオロギー、組織問題）を中心に活発に展開された[9]。このような研究は労働者と都市貧民の日常生活と組織活動を詳細に追跡し、韓国における近代的階級・階層の形成過程を究明しようとした。

しかし、1990年代に入ってから階級を中心にしたパラダイムは、急激に影響力を失い、その結果、そもそも労働者や農民階級が如何に形成して成長してきたのか、また、彼らの運動経験が解放以来どのような役割を果たしたのかに対する関心も次第になくなってしまった。1990年代の半ば以後、少数の研究者以外は階級・階層と社会運動に関する研究をしていない。階級研究に対してどのように意味づけをしていくか、いささか図式的に行われてきた既存の研究方式をいかに突破していくか、さまざまな問題が残っているのは間違いない。とはいえ、このような研究は当時の「人々」の歴史を下から生生しく再構成することができる、社会史研究の重要な分野であることは言うまでもない。労働者や農民は勿論、そのカテゴリー以外の様々な集団と個人に対する研究がより多彩に持続できることを期待する。

2．家族と女性

最近の植民地社会史研究で、最も注目を集めている研究部門を選ぶとすれば、やはり家族と女性研究をあげることになろう。植民地時期の女性についての研究は、女性労働の研究[10]と農民家族研究[11]が中心になっていたが、この時期の女性を考察する際、欠かせない戦時期の「慰安婦」関連研究[12]も持続されてきた。

1990年代の後半に入ると、女性と家族研究に変化が起こり始める。まず、近代的意味における家族観念が植民地期に「形成」されたことを強調し、その形成過程にかかわった多くの家族言説（「子供」また

は「母性役割」言説）を究明する一方、伝統と近代に関する従来の区分に挑戦して、女性に対する観念の中でいわゆる「伝統」がどのように考案されたかを明らかにした[13]。これらの研究は、いずれも家族や女性に対する意識と観念の問題を主な対象にし、フーコー式の系譜学的な研究方式や植民地法人類学の成果などを植民地女性や家族研究に結合させた。

慰安婦の研究は、最初の段階では当時の「事実」を追求するため始まったが、作業が進む中で二つの方法上の転換が生じた。まず、一つは口述史（oral history）の重要性についての再発見である。初めは「挺身隊」に関する研究から出発したこの作業は、事実究明のために、日本政府を相手取り「真実」を明らかにする文書の公開を要求しつづけた。しかし、当時の責任者が誰だったのかを巡る際限のない論争の中で、研究者達は、いわゆる加害者を相手に、加害者のもつ（「真実」を明らかにしてくれると思われる）資料を渡すよう要求することの無意味さ[14]を悟り、慰安婦だった人物を探し求めるにいたった。韓国の国内外で長い間沈黙していた人々を探し出し、彼らの経験談を採録しながら、この女性達が異なる側面から当時の実態を再構成してくれることを発見した。これは文書資料の解読作業だけで植民地社会を再現してきた旧来の研究慣行に対する、反省の過程でもあった。

他方、もう一つの問題はこの女性達とその経験を、どのように再現（representation）するのかということであった。最近研究者たちが認識しはじめたのは、彼女らを単に無力な被害者のイメージとして客体化してしまった従来の研究の限界であった。「慰安婦」として犠牲された「あのとき」だけではなく、「その後」から今まで自分の生き方で生きてきた彼女達の経験をありのままに再現することによって、韓国社会が彼女達をどのように誘導あるいは制御してきたのかに目を向けるようになった[15]。このような方法論上の模索とそれが公に議論されてきた過程は、慰安婦問題研究にとどまらず、女性史および植民地社会史の研究全般で最近論議されてきた、いわゆるサブアルターン（subaltern）の再現方式とも関連して、新たな方法論を生みだす上で

大きな刺激となろう。

次に、素材の変化について簡単に紹介する。最近の女性研究で活発に扱われているテーマは、いわゆる新女性の研究[16]である。近代教育を受けた新しい世代の登場は、植民地史における重要なテーマであり、新女性はその代表的な一集団といえる。自由な性と愛、女性解放などが活発に論議された1920〜30年代、新女性たちが新たな可能性に挑戦し失敗した歴史は、女性史に対する関心の高まりとあいまって新しいテーマとして登場した。しかし、時代の変化に伴う意識や生活の変化は新女性のみならず、教育を受けられなかった農村の既婚、未婚女性達にも程度の差はあるものの共通に見られる現象であったから[17]、今後より多様な研究が展開されることが望まれる。

3．植民地支配と近代性の問題

このテーマには様々な研究が包含されうるが、ここでは最近の研究傾向に限って扱うこととする。植民地近代性に関する論議は、1990年代以後、社会史学界を含めて韓国の歴史学界全体で、最も重要なテーマの一つとされた。従来の研究では、植民地性と近代性を相互対立的な概念として理解してきて、近代性が解放や進歩であれば、植民地性は近代性を阻止する収奪や抑圧の様相を総称することとした。韓国の歴史学界は、植民地化以前から韓国政府によって進められた近代化の試みやその失敗を明らかにする「内在的発展論」を展開したが、近代性が何であるのかという省察は充分に行わなかった[18]。1990年代になってから近代性の概念は、解放の裏面にある規律や統制・抑圧や監視という側面から理解されるにいたって、植民地近代性に対する解明研究も活発になり始めた。

一方植民地期を「過酷な収奪と暴圧的支配、そしてこれに対する限りない民族的抵抗」と表現してきた従来の図式も、絶えず挑戦を受け論争の的となった。経済史学界が'収奪'ということに対して「植民地近代化論」で疑問を表明したように、社会学界では「暴圧的支配」に

関する再解釈が試みられた。このような再解釈は、植民地下の主体形成の問題と深く関わっていく。

『近代主体と植民地規律権力』[19]は植民地「支配」と主体形成に対して問題提起をおこない一定の説明を試みた代表的な文献である。要するに日本の植民地支配を理解しようとするとき、単に「上からの強制」と、これに対応する「民族的抵抗」によって理解する図式が常に正しいといえるのか問いかけた上で、被支配者達は日本帝国主義に対立しながらも似ていく過程を歩み、そのような過程が植民地権力によって推進されていたと主張されている。したがって、植民地の被支配層が統治の対象でありながら、同時に自ら植民地支配体制を維持、再生産する主体となる過程を、学校・工場・収容所・軍隊などで規律が内面化されるということで説明した[20]。

同書は植民地「支配」に対する関心を高めるとともに、植民地朝鮮における近代性と植民地性をどのように把握するかをめぐり多くの研究に刺激を与えた。植民地時代の近代化に関する研究は、主に経済史の領域で開発か収奪かをめぐって行われてきたが、この研究をきっかけに、社会の多様な領域を対象とするようになった。最近は植民地朝鮮の都市生活と近代化に関する関心が高まり、文明化に対する憧れと朝鮮人としての疎外感の共存、そして「周辺人的否定意識」を持った当時ソウル市民たちの集団心性を指摘した研究[21]や、都市を中心に行われた犯罪や処罰制度の変化に対する検討も行われた[22]。

近代性の問題は、解放以降の社会変動とも関連があるだけに、『近代主体と植民地規律権力』では、近代と現代の関係を「肯定的な連続説」と「否定的な連続説」に分けて、後者の立場で植民地下の戦時総動員体制が現代の南北韓で再生産されたことを強調しているのである[23]。韓国社会の各部分の近代化過程を分析する時、植民地時代と「その後」の連続性をどのように把握・評価するかは大きな課題にちがいない。今のところ最も重要なのは、現在との関連性の中で近代を見直し、多様な領域で展開された近代化(植民地支配)がはたして南北韓の人々(精神や身体まで含む)にとってどのような意味をもたらした

かを慎重に問い返す作業である。このような連続性の問題は、韓国の近代と現代を概ね断絶的に把握してきた既存の研究傾向に対し、新たな課題を突きつけるものでもある。

植民地支配と近代性に関するテーマの中で「伝統」と「知識体系」の研究に対しても簡単に紹介しておく。1990年代以後の新しい傾向として、支配手段としての知識生産と制度化過程を取りあげる研究が活発になった。近年の「知識」に関する研究は、伝統と近代的な知識の間で生じたヘゲモニーの逆転と支配の問題を解明することに力点をおいている[24]。特に伝統的な知識と世界観、日常的な観念の体系が、植民地期に日本を通じて本格的に導入された西欧の知識体系によってどのように代替されてきたかを明らかにした。西欧式時間と医療体制、家族の観念に関する研究や帝国大学体制と韓国語の関係を究明した研究がこれに属する[25]。

また、近代的な知識が伝統的な知識を一方的に駆逐するのではなく、両者が新たに折衷されるという点に着目した研究[26]は、旧来の「慣習」が「尊重」という名目でどのような「発見」(invention) をし、新しい観念体系として定着してきたかを究明した。一般的に伝統は、植民地近代化が推進される中でほとんど否定され、断絶されたことであると看做された。しかし、近年、いわゆる伝統というのが昔からのそのものではなく、新たに支配側によって選択されて、また再解釈されたものであると理解する研究が行いつつある。

植民地近代性に関する研究は、以上のような問題意識をもとにより綿密な検討や明瞭な概念化作業を続けることで、もっと発展していけると思う。このような作業がなおざりにされたりすると、植民地下の支配と近代性に関する研究の意義は半減してしまうだろう。

Ⅲ. 植民地期社会史研究の発展と拡大のために

以上、社会史の研究動向を最近の成果を中心に整理してみた。その

中には、従来の研究では対象とされてこなかった開拓的研究が多く含まれているが、まだ充分に展開されていないと思われる部分も残されている。今後の研究課題と思われる3つの問題を呈示しておく。

第一に、より活発な比較研究が望まれる。西欧の社会学者が活用してきた歴史比較学的な研究は、特定の時期や社会の姿をより明確に示しうる長所をもつ。ただし、現在、植民地社会を研究する韓国社会学者のほとんどは一次資料を利用し実証研究をしているが、これは社会学者達の関心領域に関わる先行研究が、いまだきわめて不足しているためである。このような状況のもと、比較史に挑戦し膨大な努力を注いだとしても満足しうる成果をあげえないという事情から、比較研究は遅々として進まない状況にある。

であるにせよ、植民地社会像を総体的に把握するには比較研究がより積極的に進められる必要がある。現在、韓国では東アジアに対する関心が高まっているが、この地域の近現代史に関する知識は非常に不足している。特に、同じく日本の支配をうけた台湾、満州、サハリンなどに関する地域研究は、植民地朝鮮の経験を相対化しうるし、日本の植民地体制や東アジア地域に関する全体像を提供することもできよう。現在、日本では比較的このような研究[27]が進んでいるので、それらの研究業績に対して綿密な検討が求められよう。

第二に、世代の変化に関して注目する必要がある。朝鮮社会は、開港や近代化の推進、また植民地化など多大な社会変化を経験してきて、その間、当然のことながら世代が替わってきた。特に植民地化以降に生まれて近代教育をうけながら成長した世代は、親の世代とはまた異なるアイデンティティや感覚を身に付けていたと思われる。彼らに対する研究はすでに注目の的になっていたモダンガールやモダンボーイの研究で部分的には行われたが、果してこの「モガ・モボ」達が新しい世代を代表するとはまだいえない段階であろう。この新しい世代は解放以来、南と北朝鮮社会を動かす主流であったはずなので、彼らの植民地下の被支配経験や集団心性に関する研究は、現代史を研究する

にも不可欠な資料になるだろう。

最後に、韓国の肥大した支配機構と支配のシステムに関する問題は、植民地経験を整理する際、必ず直面せざるをえない課題である。植民地経験とは、ただ36年間の経験として回顧されるだけの「過去」ではなく、解放以後にも持続される一種の「構造」として取り扱う必要がある。長く軍部支配が続けられた歴史の中で、韓国社会は、残念なことに植民地下の反民主的な支配方式と全体主義的な動員手段などを積極的に活用・再生産してきた。軍隊・警察・監獄はもちろん、仕事場と学校などの場所は、20世紀韓国社会の支配構造を究明するために看過しえない研究対象となるのであろう。

支配機構のほとんどは、植民地時代、近代的に改編されたもので、それらに関する分析を通じて、制度及び時期別の政策的変化だけではなく、社会構成員の個々人に作用してきた支配・都制の機制が解明される。このような作業はきわめて重要な課題の一つである。本来、社会史は政治史や国家史に対して批判的な立場であって、支配政策研究やその史料を利用することに消極的な姿勢であったが、以上の課題を果たすためには公式文書の重要性をより積極的に認識して活用すべきである。

ただし、このような研究を進める際、より慎重に考えねばならないことは、社会構造が個々人に一方的に加える作用だけではなく、構造に対する大衆の反作用についても充分に解明されなければならないということであり、今までの政策一辺倒の研究を乗り越える新しい方法論が生み出されねばならない。

現在韓国では学際的研究が比較的に活発に進められている。その分歴史学と社会学の距離も、以前と比べて近くなり共同研究の機会も増えている。しかし、まだ韓国では社会学者として植民地時期を研究するにあたっては、「時代との不和」[28]を覚悟せねばならない。であるにせよ、社会史の研究業績全体において植民地期研究が占める重要性が減少したことは決してなかった。近年、人文社会科学界全体におい

て植民地期に対する関心が増大してきたのにともない、社会学者が植民地研究に寄与しうる領域はさらに広がると思われる。さしあたり、流行としての植民地研究ではなく、新たな研究対象と方法論を開拓しつつ、韓国社会の近代的な原型を明らかにする研究が持続できることを望んでみる。

註

1）社会学的アイデンティティー（identity）を強調するために歴史社会学という規定を用いる場合もあるが、社会史研究と厳密に区分しにくいので、この論文では、一応「社会史」で統一することにする。

2）신용하「韓国社会史의 対象과 ‘理論’의 問題」『韓国学報』25輯，1981.

3）社会史研究動向を検討した既存論文で 박명규「한국사회사연구의 새로운 방향」『韓国社会史学会2002年度定期学術大会論文集』2002；지승종「한국사회사의 학문적 상태와 지향－사회학적 전통을 중심으로」『韓国社会史学月例発表会発表文』（未刊行）2001；박명규・김경일「한국근대사회와 사회사연구」『韓国学報』80，1995；金弼東「최근 한국사회사연구의 성과와 과제：방법론적 성찰」『사회사연구의 이론과 과제』문학과지성사1990.

4）既に民族運動の思想と流れを究明してきたシン・ヨンハ(신용하)の研究は例外にする。シン・ヨンハの研究は数多いためここでは著書だけをあげる。
『独立協会研究』一潮閣1987；『한국근대사와 사회변동』문학과 지성사1980；『박은식의 사회사상 연구』서울대학교 출판부1983；『신채호의 사회사상 연구』한길사1984；『韓国民族独立運動史研究』을유문화사1985；『한국현대사와 민족문제』문학과 지성사1990；『근대한국의 민족운동과 사회운동』문학과 지성사。他にも義烈団を中心にした김영범『한국근대민족운동과 의열단』창작과 비평사1997.

5）朝鮮の階級構造自体を説明しようとした巨視的な研究として백욱인「식민지시대 계급구성에 관한 연구」『한국사회의 신분계급과 사회변동』、韓国社会史学会論文集第7集1987があり、この他に박명규『韓国近代国家形成과 農民』문학과 지성사1997.

6）한도현「1930年代農村新興運動의 性格」『韓国近代農村社会와 日本帝国主義』문학과 지성사1986；김현숙「日帝下의 民間協同組合運動에 関한 研究」，同上書1987；이종민「1930년대초반 농민조합의 성격연구」『연세사회학』10・11合本号、1990。

7）이준식『농촌사회변동과 농민운동 일제침략기함경남도의 경우』、민영

사1993 ; 이준식「세계대공황기 혁명적 농민조합운동의 계급・계층적 성격」『역사와 현실』11、1994。

8) 신기욱「농민과 농민운동－일제하 농민투쟁을 보는 시각에 관하여」『연세사회학』10・11합본호、1990 ; 신기욱「1930년대 농촌사회 변화와 갈등 : 그 기원과 유산」『동방학지』82, 1993 ; GI WOOK SHIN(1996), *Peasant Protest and Social Change in Colonial Korea*, Seattle and London : University of Washington Press.

9) 신용하「朝鮮労働共済会의 創立과 労働運動」『韓国의 사회신분과 사회계층』、문학과지성사1984 ; 신용하「1922년 朝鮮労働連盟会의 創立과 労働運動」『韓国近現代의 民族問題와 民族問題』、문학과 지성사1989 ; 김준 「일제하 노동운동의 방향전환에 관한 연구」『일제하의 사회운동』、문학과 지성사,1987 ; 김영근「1920년대의 노동자의 존재형태에 관한 연구」『일제하 한국의 사회계급과 사회변동』、문학과 지성사1988 ; 김경일「일제하 도시빈민층의 형성」『일제하의 사회계급과 사회변동』、한국사회사연구회논문집12,1986 ; 김경일『일제하 노동운동사』, 창작과비평사1992 ; 김경일『이재유 연구 : 1930년대 서울의 혁명적노동운동 연구』、창작과비형사 1993。

10) 정진성「식민지자본주의화과정에 있어서 여성노동자의 변모」『한국사회학』4、1988 ; 이정옥「일제하 한국의 경제활동에 있어서 민족별차이와 성별차이」『한국사회의 여성과 가족』、문학과지성사1990 ; 서형실「식민지시대 여성노동에 관한 연구」『同前書』 ; 문소정「일제시대 공장노동자계급의 가족적 배경에 관한 연구」『한국의 사회와 문화』14、한국정신문화연구원1990 ; 강이수「日帝下綿紡大企業에 있어서 노동과정과 여성노동자의 상태」『한국근현대의 사회조직과 변동』、문학과지성사1991 ; 이효재、『한국의 여성운동 : 어제와 오늘』、정우사1991 ; 강이수「1930년대 여성노동자의 실태」『국사관논총』51、1994。

11) 문소정「日帝下農民家族에 관한 연구」『일제하의 사회계급과 사회변동』、문학과지성사1988。

12) 정진성「억압된 여성의 주체형성과 군위안부동원」『사회화역사』54、한국사회사학회1998。

13) 김혜경「植民地時期家族에 관한 계보학적 연구－어린이 모성의 형성을 중심으로」『사회와 역사』58、한국사회사학회、2000 ; 양현아「식민지시기 한국가족법의 관습 문제Ⅰ」『同前書』。

14) もちろん文書がもっている客観的証憑価値を否定するのではけっしてない。

15) 양현아「증언과 역사쓰기」『사회와 역사』60、한국사회사학회2001。

16) 조은/윤택림「일제하「신여성」과 가부장제--근대성과 여성성에 관한 식민담론의 재조명」『광복50주년 기념논문집』1995 ; 김경일「일제하의 신여성연구」、『사회와 역사』57、2000。

17)農村女性の殺人事件を中心にこの問題を扱う試論的研究で、이종민「전통・여성・범죄：식민지권력에 의한 여성범죄분석의 문제」『2000年度後期社会学大会発表論文集』2000。

18)박명규「한국사회연구의 새로운 방향」、『韓国社会史学会2002年度定期学術大会論文集』、2002。

19)김진균/정근식『근대주체와 식민지규율권력』、문화과학사1997。

20)同書に収められた代表的な論文を紹介すると次のようになる。김진균/정근식「식민지체제와 근대적 규율」；김진균/정근식/강이수「보통학교체제와 학교규율」；강이수「공장체제와 노동규율」；조형근「식민지체제와 의료적 규율화」；홍일표「주체형성의 장의 변화：가족에서 학교로」。

21)김영근「일제하 식민지근대성의 한 특징－경성에서의 도시경험을 중심으로」『사회와 역사』57、2000。

22)이종민「식민지시기 형사처벌의 근대화에 관한 연구」『사회와 역사』55、1999；이종민「경성주민들의 '죄'와'벌'－경범죄처벌을 중심으로」『서울학연구』、2001。

23)김진균/정근식「식민지체제와 근대적 규율」、『근대주체와 식민지규율권력』22頁。

24)김경일「좌절된 중용：일제하의 지식형성에 있어서 보편주의와 특수주의」『사회와 역사』51、1997。

25)정근식「일제하의 서양의료체계의 헤게모니형성과 동서의학논쟁」『한국의 사회제도와 사회변동』한국사회사연구회논문집50集、1996；정근식「한국의 근대적 시간체계의 형성과 일상생활의 변화I－대한제국기를 중심으로」『사회와역사』58、2000。이준식「일제강점기의 대학제도와 학문체계：경성제대의 조선어문학과를 중심으로」『사회와 역사』61、2002。

26)양현아「식민지시기의 한국가족법의 관습문제I－시간의식의 실종을 중심으로」『사회와 역사』58、2000。植民地支配権力によって行われた慣習調査のなかで選択されたいわゆる「伝統」が、男性に優位を与える家族法のもとになったことは、近代性のプロジェクトとも親和力を持つことでもあったことを指摘している。

27)筆者が参観した京都大学人文科学研究所の「日本の植民地支配―朝鮮と台湾」共同研究は台湾と朝鮮研究者が集まって二つの植民地社会の共通点と相違点を検討してみる、興味深い研究会であった。その成果は、近い内に単行本で刊行される予定である。その他に日本の歴史学界で現れている日本「帝国」研究も東アジアの近代史を再照明する新しい試みとして注目されている。

28)植民地社会史研究が急変する現実的な問題と距離をおいているかのよう

に見なされ、その実用性に社会学界一般が懐疑を抱いていると感じられるためである。지승종「한국사회사의 학문적 상태와 지향」『韓国社会史学会月例発表会の発表文』中。

要約

일본의 식민지 지배와 한국사회변동—사회사를 통해 본 연구동향과 과제

최근 한국에서 사회학자들에 의해 이루어진 식민지 사회연구는, 식민지 지배와 근대성의 문제, 여성과 가족 연구 등을 주된 테마로 하고 있다. 과거에 이루어진 식민지기 연구가 주로 계급/계층을 비롯한 신분의 존재형태와 사회운동 및 조직경험, 사회사상과 종교 연구등이었다면, 1990년대 이래 테마와 연구방법면에서 큰 변화가 이루어진 셈이다.

1990년대 한국의 인문사회과학계에서는 식민지 근대성을 규명하고 재해석하는 작업이 폭넓게 이루어졌고, 사회학계에서도 기존의 수탈과 착취, 폭압적 지배에 대한 도식적 연구를 넘어서려는 노력이 이어졌다. 사회학계에서는 주로 지배에 대한 연구에 집중하여, 주체형성의 관점에서 일본의 식민지 지배기구가 감옥, 경찰, 군대 등의 억압적 국가기구는 물론 학교, 병원, 일터에서 어떻게 대중들을 통제해왔지를 밝히고자 하였다. 그 결과 정치, 경제적인 [제도] 차원의 근대화 분석이 아닌, 신체와 정신을 제압하는 식민지 지배를 규명하려는 시도가 이루어져, 학계에 새로운 논점을 제공한 바 있다. 최근에는 지배의 헤게모니 장악을 위한 지식의 창출과 전통적인 관념의 활용에 대해서도 활발히 연구되고 있으며, 도시화에 따른 생활의 변화에 대한 관심 또한 높아지고 있다.

아울러 최근들어 여성에 대한 연구가 활발히 이루어지고 있는데, [일하는 여성]으로서 노동자, 농민층의 여성을 중심으로 다루던 종래의 연구에서, 근대가족과 신여성의 등장과 그 의미연관에 관한 연구가 중심이 되고 있다. 또한 위안부 여성을 대상으로 한 연구에도 다양한 관점이 시도되고 있다. 이러한 일련의 변화는 포스트식민주의의 영향으로 인한 연구 대상

의 이동과도 관련이 있다고 여겨진다.

이상과 같이 최근의 사회사 연구는 경제 영역에서 개발이냐 수탈이냐를 둘러싸고 다소 제한적으로 다루어지던 식민지 근대성에 대한 기존의 논의를 전 사회적 영역에서 이루어지던 식민지 지배의 다양한 방식을 밝히는 연구로 확대시키고 있다. 아울러 전통과 근대, 식민지성과 근대성, 근대사와 현대사 사이의 단절적 구분에 도전하는 새로운 문제의식과 해석 또한 활발히 시도되고 있다. 아무쪼록 새로운 문제제기들이 보다 면밀한 검토를 거쳐, 다양한 결실을 맺을 것을 기대한다.